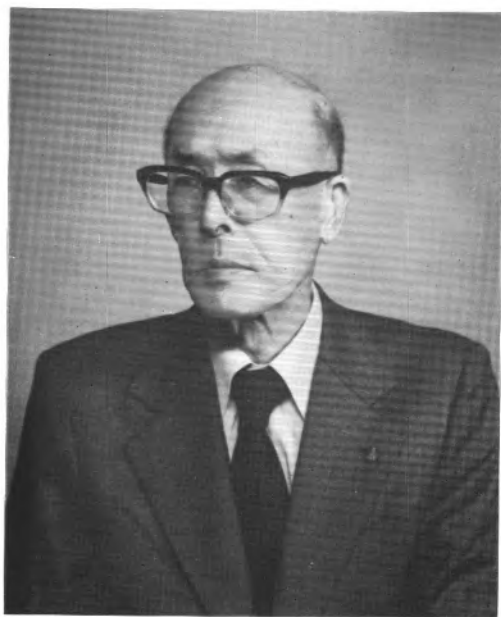


句集
足跡

羽原静歩



著者近影

序文

考えるほどにロダンが痩せてくる

これは静歩さんの句で、ロダン作の「考える人」をヒントにした自画像である。静歩さん以上に瘦身の私は、一読して、分る分ると頷かされる。静歩さんと私が似ているところは痩せていることぐらいで、電話で話をするにしても、静歩さん一人が喋って終りになる。喫茶店や飲み屋でも、二人になると談論風発、静歩さんの独壇場となって止まることはない。

静歩さんは、ここ十年来、私が選を担当する電波新聞柳壇に投句を寄せてくださる、いわば電波川柳のファミリーの一人なのだが、その投句ぶりも、先に述べた饒舌と同じで、まるで機関銃さながら、多作作家のベストスリーに入っている。概して多作の人は、視野は広いが、句に重みがない。静歩さんも、はじめのうちはそのような傾向であったが、近来、頓に奥行きを備え

た味わい深い句が多くなり、進境著しいものがある。

投句者と選者は、ピッチャーとキャッチャーのようなもので、投球の一句一句にずっしりとした手応えが伝わってくる。野球においても、カーブやシンカーという変化球は、ある日突然に会得するものであろう。静歩さんにもそういう時期があったのだが、何といっても、重みのある速球が投球の基本となることに間違いない。重みのある速球とは、川柳では、心であると私は思っている。

静歩さんは、これからも作句に励まれて、喜寿のお祝いに、足跡第二集を編まれるよう念願しながら、以下、静歩さんの作品を鑑賞して、序文といたしたい。

初孫へ先ずは教える「ありがとう」

パパがいてママがきれいな日曜日

粧えば娘は娘母は母

わが妻のソックリさんに出会いけり

静歩さんの家庭の和やかなたたずまいが感じられ、どの句にも暖かい心にじみ出ている。

幼稚園燕が二つ巢を作り

泣き虫は泣き虫同士手をつなぎ

幼稚園の経営者だけあって、幼稚園の雰囲気は鮮やかに描写されている。

鉛筆の音がかすかな懺悔録

宗教にはうとい私ながら、この句には襟を正した。饒舌だけの人ではないことが分る。

館山寺入江の奥の秋の空

遊覧船風邪ひきそうに二隻いる

前者の中七のすばらしさは並のものではなく、下五へ続く措辞に一分の隙もない。旅行吟中の圧巻だろう。後者は、アメリカでの所見らしく、軽妙な写生の味を出して旅愁を引き立たせる。

モンスタージュ桃の里にも貼られたり

大和には大和のルージュ曼珠沙華

七草をバイクにつけて淀の秋

顔見世も横文字で読む京の街

四季の句も、俳句とは隔然とした味を出し、静歩さんの力量のほどを示し

ている。

遍路笠コカコーラを呑んでいる

Tシャツの背中を走るヨットかな

昭和元祿もたこなんきんウイスキー

現代性を的確に把握したこれらの句には、したたかな批判の眼が感じられ、他にも辛辣な秀作は多いのだが、静歩さん自身の判断で削除されたのは如何にも惜しい。

静歩さん、自然も人生も、玄妙ならざるはなしとされる只今の境地を、さらに川柳の触角で探り当て、今後も、ずしりずしりと重い球を投げ続けていただきたい。

人生のグーチョキパーがままならず

昭和五十七年十月二十六日

川柳塔社・副主幹

橘 高 薫 風

足跡
目
次

序文——橘高薫風

思い出の句 16

教師 16

戦時懷古 23

句会の灯 28

孫 32

幼稚園 42

ふるさと 66

女		79
信 仰		99
旅		119
春夏秋冬		164
足 跡		205

跋——高杉 鬼遊

あとがき

あとがきにそえて

足
跡

吹けば飛ぶいのちの今日を長らえる

思い出の句

教師

初の辞令

先生の月給確かに四十五円也

「愛媛県公立小学校訓導ヲ命ス。当分月俸四十五円ヲ給ス」の辞令をもらった。あれから五十年。全く夢のようである。

(昭和八年三月三十一日)

雨の日の体操童話を読んでいる

出来ぬ子の瞳が何か言いたそう

教案の急所突かれた答案紙

ハプニング又ハプニング指導案

文化祭「坊っちゃん展」を褒められる

メーデーの旗の中なる日教組

六三は萌しのような子に育ち

これがまあ家の子どもか書道展

「ざあます族」もチラホラいますPTA

休職の教師が語る裏話

卒業の以下同文が物足らず

退職と決めてネクタイ選っている

共稼ぎ職員会がうらめしく

先生の一声鶴にもなりきれず

辞表書くカーボン紙の寒々と

守口一中退職

潮騒へあの顔この顔思い出し



戦時懷古

来るものが来たと赤紙じつと見る

大阪駅西と東の泣き別れ

部隊は駅の西口に集結、それとも知らず家内は東口で待っていた。全く皮肉な別れであった。

船艙の此処は地獄の一丁目

指揮官はノイローゼ兵隊が一人死に

黙々と瓦礫の中を長い列

防空壕禪一つで水を出し

「寒水」は寒し乳牛の世話を焼き

寒水は漢口（現在の武漢）よりより軍用バスで約二十分位の所。そこで乳牛を飼っていた。

捧げ銃隊長殿はほろ酔いで

新兵が乳房炎に気をつかい

編隊の六十一機を数えたり

敗戦という勲章を抱いていた



句会の灯

帰還船博多の土へ嬉し泣き

大万川柳春季大会で席題「嬉し泣き」が、岸本木魚先生の選により抜かれた。平凡な句ではあるが、川柳を通じて、しみじみと生きているありがたさを知ることが出来た。

(昭和四十年三月十四日)

利食いして蝶ネクタイに隙がなし

当日の兼題「ネクタイ」が、若柳潮花先生の選により、
天位に推され、天の天賞に選ばれた思い出深い句である。

(昭和四十二年一月八日)

五十年女の坂は七曲り

この日兼題「坂」が、橘高薫風先生の選により天位に推され、天の天賞に選ばれた。亡き母を思ふ実感の句である。

(昭和四十二年八月七日)

ジングルベル小さな闘志失わず

この日席題「ジングルベル」が橘高薫風先生の選により
天位に推され、天の天賞に選ばれて三度トロフィを授与
された。

(昭和四十二年十二月八日)



孫

産声もハッ
シハッ
シと太郎冠者

爺ちゃんが抱けば初孫こわれそう

見えだした聞こえ出したとオルゴール

這うて来る孫へアタフタ片付ける

食べ初めの孫はキョトンとするばかり

初孫へ先ずは教える「ありがとう」

アラレちゃんが笑ったような孫の顔

マンションの廊下ゆっくり三輪車

ガンダムが好きでどうしても買わせる気

もてあます孫へ手を変え品を変え

ローソクがゆらゆら揺れてお誕生

三倍の大きな靴を引きずって

孫の瞳に積み木の家の王子様

爺ちゃんが紙風船をついて見せ

せがまれて孫に夜店の綿菓子を

クリスマスはてさて孫に何を買う

耳鼻科では静かに漫画読みふけり

「お爺ちゃん食べにお出で」と電話口

泣く訳を聞けばぬれてるバスタオル

手も足も可愛い可愛い魚屋さん

三歳のせりふキツパリ反抗期

八歳と六歳派手な喧嘩する

おめでとう卒園証書をポンと置き

お稽古は算数ピアノスイミング

孫連れて桜並木を通りけり

元日の喜び孫が五人いて



幼稚園

幼稚園の春秋泣いたり笑ったり

親も子もファッションショーの入園式

入園式泣く子騒ぐ子あってよし

雛めいてペンギンめいて苑の春

電子オルガン春が脹らみ春の歌

ワッペンの胸風を切り風を切り

幼稚園燕が二つ巣を作り

三匹の子豚の話よく覚え

スモッグにチョッピリ酔うた鯉のぼり

ブランコのボスが春風切っている

母の日のフォークダンスに血が通い

ジャンボ機の空へゆつくりシャボン玉

七夕へ風のある日の幼稚園

三歳の童女水着の煌びやか

靖国寺

合宿を「おとまり保育」というムード

マスゲーム「かおり」の三字鮮やかに

童心のピアノカ鼓隊秋を斬る

栗拾い栗はチャッカリ置いてある

造形展軍艦大和も顔を出し

お隣りはピカソこちらはマチスなり

クレパスの折れた瞳にママがいる

避難演習ガスの元栓見て走り

神主の祝詞が寒い七五三

保母の背に流れる冬陽あたたかし

子が拗ねて親があわてる電話口

めでたさはスクールバスにも注連飾り

寒々と渡り廊下へ初春明ける

節分の鬼もピタリ掲示板

鼓笛隊火の用心へパレードし

お稽古の卒園式へかしこまり

モンローのお尻もいます幼稚園

ピアノレッスン幼稚園より帰る

春はもうそこにスクールバスの顔

保母さんもお別れ会の隠し芸

卒園の声ははずんだ春の風

母と子の一人一人の手を握り

もう乗れぬスクールバスよさようなら

御機嫌がよろしい朝の汽車ポッポ

幼稚園朝のショックがまだ続き

鳥小屋のセキセイインコも恋をする

幼稚園サービス業になりすまし

よく出来た満三歳のごあいさつ

古タイヤ生かしてこんな遊びよう

積み上げて崩して積み木のお家です

クレパスのお散歩今日は何を描く

野良犬がひよっこり来ている幼稚園

けっ
たいな粘土遊びの顔と顔

平均台ウルトラCの夢を持ち

ドレミファのように並んだ攀登棒

好き嫌いなんにも言わぬお昼時

すべり台にっ転んで順を待ち

お客様は神様願書を持って来る

雨雨雨幼稚園には降らないで

はりきった園歌へピアノ負けている

折り紙は鶴のよう豚のよう

お隣りと比べて食べるお弁当

紙芝居すると静かになってくる

鳩時計止ったままの幼稚園

お返事もバラエティある幼稚園

お早ようを何べん言います園長さん

平仮名でお名前だけは書けました

ホームクラス ママのお迎え待ばかり

つれづれに読む幼稚園の百年史

祝早苗幼稚園創立二十周年

産声をあげてはたちの幼稚園

祝第二十五回寺方幼稚園卒園式

春風へ土筆の坊や起きて来る

祝第十三回かおり幼稚園卒園式

親も子もジャンプしている春の瞳よ

祝御幸幼稚園バザー

バザー光る千客万来秋が澄み

幼稚園事故のない日へ掌を合わせ



ふるさと

今治懷古

ふるさとの絵馬堂時雨するばかり

この句、昭和四十七年六月十一日ポートランドの仏教
会で開催された、日米親善川柳大会の兼題「ふるさと」
で抜かれた句。選者は延永忠美先生。

墨絵めく塩田今日も玉の汗

来島に磯の香りを吸い歩き

舟虫のぞろりぞろぞろ七変化

のんびりと網を乾してる昼の顔

吹上の城に少年の夢を追う

吉忠の浜も涼しきラムネかな

ゆらゆらと舳は本船横付けに

ふるさとのタオルケットの肌ざわり

蒼社川その川上を懐しむ

松山懷古

句碑樂し伊予路の子規と漱石と

恩師を憶う（二句）

漣のように恩師の咳を聞く

風雪の窓に米寿の菊薫る

遙かなる郷愁門衛のラッパ鳴る

幻の中にドームの見え隠れ

石槌の窓しらじらと明けてくる

萬物流転伊予富士が美しい

愛媛大学同窓会（三句）

集い来て時の流れの顔を持ち

猫背よし昭八会の生き残り

子規堂で女の業か針供養

子規記念博物館（四句）

咯血し子規と号する悟りかな

坊っちゃんも子規もいました愚陀仏庵

「病牀六尺」旅路の果ての安らぎか

怒れるか呻きか祈りかモルヒネか

伊予はよし石手におはす仏たち

しぐれてもしぐれても石手の遍路笠

山頭火松山にて死す

そのいのち此処に極まる運命かな

三巨頭を憶う

ああ子規 漱石 山頭火のシルエット

おぼろ月松山城の緋毛氈

奥道後儲けた顔が浸かっとり

四十島マドンナにつこり出て来そう

伊予節の声もおぼろに酔うている

海鳴りの底にふるさと滲み出る



女

勲章はいらぬ母ひとすじの道

亡母を思う（七句）

算数が百点だった母の顔

追伸に餅を送ると二三行

生田流小勾当への遠い道

母の弾く琴のしらべに姫達磨

睡蓮のあくまで白く母を恋う

妥協した瞼の中に母がいる

ボタン付け母はかすかに咳をする

長女の結婚を祝う

結ばれて白梅の坂登りけり

長男の嫁の急逝を悼む

吾子守る蓮の台はとこしえに

恋水好子氏の結婚を祝う

その寝顔日本一の妻となる

黒崎千鶴子氏へ贈る

ハッピ着ても女はやっぱり女なり

クロッペンシュタイン 知子氏を迎えて

スイスよりようこそ秋の空が晴れ

ああ平和女の撮り方教えます

松下裕子氏に贈る

トラベルチェック七百ドルの艶姿

かおり幼稚園コーラス部

コーラスへ女の夢はこぼれたり

正体をチラリ覗かす花名刺

南にも北にもネオンやつれの顔

ハイヒール五十の坂を確かめる

風呂敷へ小さな愚痴を入れて来る

一夜漬けあつさり母の味となる

曼珠沙華女の瞳動かない

新妻の四方八方気が疲れ

悟り切る朝の心にキャベツ剥く

秋篠に伎芸天女の瞳かな

着飾つてチャンスに遠い顔になり

横顔がこうもきれいに苦勞する

母と子と鳩の遊べる塔でよし

脱ぎ慣れたモデルやっぱり風邪をひき

綾取りの縁えだじの中のシルエット

伊予柑をひとふき残し思慕の朝

組み紐の一つ一つに春を編む

美しき女の業よ大和路よ

山道貞江先生に贈る

揚げ雲雀五十年の走馬灯

淑やかにライバル見てる華道展

黒髪をたっぷり洗う花曇り

雑巾をしぼり家風へとけてゆく

舞扇夫唱婦隨の風に立ち

西野恵津子氏に贈る

子に孫に古き家なる栄えかな

藤原マズ子氏に贈る

結納の寿恵広確と秋の彩

家計簿にファンデーションとチラリ書く

りんどうの花に女は傾きぬ

女人高野哀しきまでの星月夜

その素顔死ぬまで捨てぬ女なり

天地の風の中なる三姉妹

五線紙へ綴る女の冬の旅

粧えば娘は娘母は母

朝市の飛驒の女よ墨絵めく

貝となる女の琴を聞いている

昭和元祿もたこなんきんウイスキー

抹茶席煎茶席にも気をつかい

苔提樹の夜霧を拭いている女

小東領子氏の結婚を祝う

幾千代をかけてケーキは切られたり

時よ止まれ山茶花ふぶきの女たち

道を説くテレサへ秋の雲遠く

敗戦の女が辿る幾山河



信
仰

天理教修養科入学（四七三期生）

ひのきしん則天去私の匂いする

明治大正昭和も一つ修養科

神様に三連休はないと知り

林家三平急逝

三平は蓮の台で高笑い
うてな

ポンコツの力いっぱい廊下拭く

柏手を二つカレーのうまいこと

ずり落ちた眼鏡の先の悟りかな

正座して大和の秋へとけている

教典のページをめくる秋の夜

車椅子瞳の中に秋が澄み

図書館で与謝野晶子の乱れ髪

生者必滅そんな心の朝を起き

漢口や木曽路の秋をふと思い

提灯のずらり並んだ不夜城よ

教服の帽子を脱いだ裏話

二世かと思う女の胡座かな

朝焼けの神殿神が澄み人が澄み

スピーチの代表ヒロポン吞んだ過去

エクレアの味よ大和の秋が冴え

柏手が揃うと浄土が見えて来る

落葉掃く心の塵を掃きながら

私の強い男のどこかノイローゼ

冷々と大和の秋の祈りかな

レモン切るその手に秋がこり落ち

スーパーも此処は天理の街の彩

天理高校のプラスバンドを見る

プラスバンド日本一の風を切り

大食堂日本地図の花が咲き

子規句集チラリ見ている秋の瞳よ

靴箱に今日の心が書いてある

さりげなくジープが通る霧の中

人様に遅れは取らぬ老いの坂

勲章という坐りだこをつけている

山海の珍味よ朝の蜆貝

修養科講道館のポーズする

タイ国の信者がくれた古切手

お賽銭人それぞれの祈り持ち

ガッツポーズ角力に限ったことでなし

越路吹雪急逝

シャンソンの越路よさらば秋の風

同姓の羽原氏に会う

ハッピー着た女の過去をチラリ聞き

世間では日曜そうとも申します

北風の素顔がきれい
タイル拭く

鉛筆の音がかすかな
懺悔録

膝頭静かに過去を語りかけ

天理美術鑑賞

端然と坐る舞妓の瞳かな

滔々と勇む心をひとくさり

電話口浮世の顔が滲み出る

神様も風邪ひきそうな時雨降る

法隆寺

物欲の流れるままに人が混み

石上神宮

巫女の踏む玉砂利サクサク秋の音

天地^{あめつち}も一つ神樂勤めかな

人間の限界神名を呼び続け

柏手は 漣か 潮騒か

郡山大教会（三句）

道の子の道の笑顔のハッピ着て

紋付を着れば神々の寵児たり

水煮きのフツフツたぎり別れかな

西東別れを惜しむ神の瞳よ



旅

生きのびて会うて別れて旅が好き

九州の旅

高千穂の酒はカッポで受けて呑み

I

肥後牛の止まるも行くも草千里

長崎鼻

焦熱の地獄へ南風吹き寄せる

白杵

石仏のどこから見ても悟りきり

岡城址フォークダンスに夢中なり

柳川に四季あり白秋の詩心

石^つ路^わの花がきれいな川下り

竹久夢二生家にて

夏草へ夢二の声が聞えそう

大湧谷

掌を合わす延命地蔵は霧の中

紅富士の雲輝やきて広がれり

佇めば十国峠の風になり

エンジンの音で浜名湖明けてくる

館山寺入江の奥の秋の空

久能山東照宮

冬の風葵の紋に凍み通り

浜坂砂丘

ことばなく海と砂丘を見遙かす

小豆島

モンキーランド人間様がたわいなし

オリーブ園

お手植のオリーブ一本毅然たり

岬の分校

二十四の瞳やっぱり生きていた

出雲路

安来節人の情けにとけてくる

日御碕

燈台の夕陽へ盃い置いたまま

尾道千光寺

文学の道しらじらと朝焼ける

鞆の浦

鯛網をたつぷりしぼり春の幸

木曽路（三句）

お六櫛継ぐ人もなく木曽の秋

さん候木曾路に候ヤングの瞳

日曜は多忙木曾路の道祖神

岡山の旅

宮本村

劍聖の昔に還る春の雨

やまめ荘

このあたり桃源郷なる昼の酒

能登・佐渡・信州の旅

千里浜

潮の香に子を抱く女颯爽と

千曲川

信濃路よ千曲の水よ夏草よ

真野御陵

玉砂利を踏んで帝^{みかど}の声を聞く

柏原

窓越しに一茶の家を眺めけり

東北の旅

平泉

夏木立金色堂に数珠光る

恐山

恐山賽の河原の冷々と

北海道の旅

阿寒湖

マリモ今ひっそりかんと見て歩き

弟子屈

町営という飛行場の静かなり

ウトロ温泉

知床のウトロの春の湯につかり

オホーツク海

流氷の少し残りて冬の彩

ウナベツ自然休養村管理センター

靴カバーつけて馬鈴薯植えている

キタキツネリスも小熊も来るといふ

小清水の原生花園

小清水の渚に両手浸している

網走

幼稚園の園児も渡る眼鏡橋

石北峠

雪は累々石北峠の春

沖縄の旅

ひめゆりの塔

御霊は還らずハイビスカスの花

守礼門

王朝の夢の跡なる守礼門

摩文仁の丘

戦いは虚し摩文仁の丘の風

沖縄の紅型染の逞しき

沖繩海岸国定公園

万座毛の海の蒼さよ玉砕よ

東南植物園

沖縄の今しきりなり蟬時雨

Ⅱ

アメリカの旅

クッキーに白夜の眠り
劳わられ

朗々の詩吟シカゴの夜にとけ

とこしえの罪を流してナイアガラ

遊覧船風邪ひきそうに二隻いる

藤村涼子氏宅

そばの味こうまでうまい
ニューヨーク

メイド イン ジャパン 摩天楼まで追うて来る

これはこれは黒人街の鬻かな

浜田久米雄先生に贈る

ラスベガス チェックの背広よく似あい

コロラドの流れは早し風の中

グランド キャニオン（二句）

キャニオンの断層呪縛の詩を聞く

啜り泣く声も黒人霊歌かな

サンフランシスコ

坂走るシスコの街に霧がなし

サンノゼ

握手して日系市長の如才なし

ポートランド

バラ祭りバラ美しき風の街

モルトノーマの滝

那智よりは一桁違う滝の音

カトリック野外礼拝堂

哲人のようにキリスト彫られたり

ウイリアム ロバート氏邸宅

これがまあ富豪のプール水の彩

日米親善川柳大会

鳴り止まぬ拍手へカップ写される

のど自慢ポートランドの夜はふけて

ハワイ

カメハメハ舌かみそうな像が立ち

フルーツの味よハワイの心足る

フラダンス踊る瞳に玉の汗

前山北海先生に会う

嬰鑠と色紙二枚を書いてくれ

ふり向けばここはホノルル美術館

フランスの旅

ルーブルの絵眩しくて眩しくて

教会のステンドグラスの輝きよ

カフェテラス春の光りを先取りし

ギロチンは冬の底から滲み出る

満月やムーランルージュを照らしけり

ベレー帽しっかり押さえ凱旋門

パリー郊外

草枕うれしきものよマロニエは

繰り返す歴史の中の菩提樹よ

ロアールの古城を語る水の彩

スイスの旅

チューリッヒ湖畔の森も雪が降り

吾子抱いてメイドの心満ち足りぬ

思惟すれど思慕すれどチューリッヒの夜

スイスの幼稚園

合唱の「サクラ サクラ」が透き通り

ママゴトの此処も楽しい幼稚園

保母さんの瞳スイスの彩にとけ

モンブラン風は切々声を吞む

コーヒーは五臓六腑に滲み通り

アンカレツジうどんツルツル食べている

ニュージーランド・オーストラリアの旅

オークランドのロトルア間欠泉

硫黄泉ブクブクブクと無気味なり

マオリ族

折り鶴がお氣に召したかマオリ族

鐘乳洞（二句）

土蜘蛛の神秘太古の闇が好き

鍾乳洞外人さんも子を抱いて

ネオンなきオークランドの夜はふけて

シドニー風景

オペラハウス帆け舟にさも似たり

ユーカリをモグモグ食べてコアラかな

モナーク大学付属幼稚園（二句）

心理学の女史テキパキとガイドする

団長とプロフェッサーのキスを見る

フィリップ島

巣に帰るペンギンさんのコミカルな

おおあれが南十字星か旅の果て

メルボルン

ベコニアの満艦飾に瞳をみはり

キャップテンクツクの家も古びたり

旅終る南十字星のバッヂ買う

シドニー発十時半の夜の灯よ

カナダ・アメリカの旅

フリーウェイ走るトヨタの車かな

スタンレー公園（二句）

トータムポール冥土の旅の一里塚

スタンレーの芝生サクサク素足なり

午前二時バンクーバーは獣めき

ニューウエストミンスターシティ

握手した温みを思う姉妹都市

デイズニールンド（二句）

デイズニールの八角時計をチラリ見る

急降下電気ボートへよろめいて

遠き日の遠き旅なる語り草



春夏秋冬

花籠に盛る日本に四季があり

新
年

守口市長木崎正隆氏へ贈る

八選を壽ぎまつる初日の出

土に還るいのちぞ初春の酒を酌む

初春の師たり弟たり福寿草

三方に初春がちいさく載せてある

おめでとう去年の肩をゆすぶって

俗臭はなし六段の調べかな

奴唄アメリカ唄と競いあい

コマ回る無心に回る昼の月

名刺交換サービスの顔ばかり

神様もあきれています初詣

花時計成人式の燦々と

元旦の決意そろそろ呆けてくる

ふるさとの訛りが走る電話口

左義長の焰とどろに天を指し



春

彼岸会の雲に父が澄む母が澄む

紅梅が咲いて課長が一人増え

スクーター春の法衣を翻し

坊さんにお茶とお菓子は縁がなし

ロッキードの膿を見ている寒椿

三千院春の愁いを捨てて来る

一輛で春の野を縫うローカル車

栄転も左遷も見てる春の雲

石段をゆっくり下りる遍路笠

落味噌の春をおぼろに食べている

万博賛歌（二句）

パビリオン歩き疲れて朧月

万博の花嫁パレード見て歩き

桜貝オイルフェンスの海に哭く

大原女が乗ってローカル動き出し

通り抜け祇園精舎の風も吹き

散るように散って桜の静かなり

都をどり素人はんの白い指

バードウィーク人間だけがいがみあい

昼寝する三毛へ黄蝶も白蝶も

鯉のぼり不倫の風はまだ知らず

矢車の果ての果てなる浄土かな

耕運機ゆっくり春の王者めく

デジタルへ闘志を刻む新入社

大卒の顔が張りきる社内報

気の早い潮干狩から風邪をひき

河川敷只今恋愛特訓中



夏

路郎賞候補作品 若本多久志推薦
七人の敵を逃れて冷奴

菖蒲園にひたひた心経が匂う

一枚の魚拓へ潮騒伏せている

風薫る揚州桂林壁画展

吉田藝樹先生に贈る

雷鳥の視野燦々と明日の夢

末法の世に風鈴のすがすがし

星座見る親子の縁とりもどし

鮎ずしのいのち青磁の皿に盛る

暑気ばらい去年のそうめん出してくる

Tシャツの背中を走るヨットかな

八木久夫氏を悼む

雲の峰そびえて疾き浄土かな

ラッキーセブン積乱雲が笑ったり

ゼリー盛る切子の皿に風があり

戦争展教科書展も開いては

反論もなく宇治金がとけてゆく

パナマ帽汗をキララにはじき出し

南風よ吹け水煙は太古の瞳

じりじりと水位が下がる地獄絵図

窓あけて鶴彬全集読みふけり

夾竹桃昨日の私が生きている



秋

なにわ川柳「この一句」

七草をバイクにつけて淀の秋

秋そぞろ夢二思えば尚そぞろ

大和には大和のルージュ曼珠沙華

モンタージュ桃の里にも貼られたり

野路菊を活けて闘志を持つ男

ピンボケのアルバム開く秋の夜

かにかくに出^{いず}石^しの秋の落葉かな

釣れたのは雑魚だけ夕焼け美しい

古都錦秋お菓子の花は咲き乱れ

ひたぶるに心は燃えて阿蘇の秋

古城今風と芒と琴の音と

妥協せぬ拳が聞いた虫の声

箴竹の秋には何かありそうで

ハンターの銃口にある秋の天

秋灯の下蒼風の鉄の花

廃校を惜しむ記念樹散り止まぬ

無一物無尽蔵落葉しきりなり

大阪文化祭川柳賞 橘高薫風選



民芸紙崩れる冬の雲となる

冬

甘酒の心の底に滲みるもの

福の神貧乏神にも雪は降り

街は木枯し銀行は札を読み

ねんねこのえんじがきれい冬の朝

坂道に苑あり冬の風なごむ

風邪ひくな氷雨降る日の野の仏

ゼムピンに書類を挟み多忙なり

顔見世も横文字で読む京の街

松屋町の風が冷たい十二月

涌波達雄氏に贈る

水仙の花の中なる闘志かな

来年の暦見ている あまのじやく

山頭火の版画展を見る

梟と風と光と托鉢と

ラグビーを見る青春の蟹気楼

トイレから冷え冷えと見る京の冬

蟹スキにポックリ寺は忘れとり

日向ぼこ猫より丸いポーズする

降り積る雪も華やぐ披露宴

うどんすきポケットメモを繰りながら

梵鐘をついて煩惱の土を踏む

時雨降る寂光院は冬の彩

生かされて生きる賀状の墨をする

水俣の海は還らぬ老いの冬



足
跡

還歴を七十七と決めて生き

尾上金吉氏を悼む

巨星墜つ遠き潮路の思い出に

橘高薫風先生の「有情」発刊を祝う

秋風に句集緋く楽しさよ

山下翠庸先生を悼む

雅号印「静歩」と刻むいのちかな

クーラーの部屋で易者にものを聞き

咳ばらい一つ会議をリードする

長兄を悼む

瞬きへ声もつまりて別れかな

北風の長屋話が荒っぽい

二次会の文学論へ酌いでくる

大塚千葉先生に贈る

緋毛氈三十石の酒のしみ

小銭だけ溢れるように年が暮れ

路郎賞候補作品 菊澤小松園推薦

コンベアに乗る人生のふとわびし

大阪文化祭川柳賞 古下俊作選

あいさつを抜いていろいろの火が赤い

いい人でしたと名前忘れとり

落葉踏む足音だけが僕のもの

黒田紅樹先生を悼む

逆さ富士旅路の果てを追うて来る

犇めいてベースアップの顔ばかり

芋づるとなって汚職の影法師

橘高薫風先生の「檸檬」発刊を祝う

一冊の句集に情けは溢れたり

小企業ですとごっそり貯めている

朗々と祝詞の中の反主流

古書展の隅に明治が蘇り

前進をすれば約手が顔を出し

潮騒へ時の流れを聞いてみる

清水亀九治先生を悼む

白菊に黄菊に明治の顔を埋め

横綱の汗が滲んだ土俵ざわ

預金する汗は小さくたたまれて

満ち足りた心湯船の隅にいる

返らない昔へダムの水が澄み

松風の中に梵鐘の銘を読む

自問自答してルールに突きあたり

チラリ見て一万円のかるさかな

真実を語れば虹も透いて見え

凡人の笑いは涙ためている

藤田桂丸君の結婚を祝う

富士晴れて結ぶ縁の朝ぼらけ

鯉節の個性を削る老いの坂

近藤和夫氏に贈る

大阪をみどりに返す瞳が涼し

すり切れた雑巾ほどの五十年

邑久町静円寺

末法の御代も読経の静かなり

切手不足速達よりも早く着き

大辞典つぶさにひいてほくそ笑む

職安の無職おどおど咳をする

語り部となる年輪の太い眉

ざりざりの線へ我執の顔が寄り

北浜の勝気この頃沙汰もなし

雲水の草鞋の底の人生譜

神様も仏も稼ぐ世の流れ

ボンコツの父にもあつた青春譜

地球儀の何処かやっぱり燃えている

マジックのような政治へ疲れきり

イエスともノーとも言えぬ裏話

なにわ川柳「この一句」

一匹狼の薬瓶とはさびしいな

橘高薫風先生の句集「肉眼」発刊を祝う

潮騒のひとつひとつが肉眼に

日本がどう変わろうと天守閣

大阪文化祭川柳賞 若本多久志選

ふり出しに帰る屋台を妻が押す

クリーン政治打出の小槌も見つからず

幻の枯山水へ鯉がはね

歳月をつなぎあわせて忘れたり

解散へピエロが緞帳引いて行く

償いの視野に子がいて妻がいて

宮岸義明先生に贈る

この城の主明鏡止水なり
あるじ

ややこしい浮世の見栄のフルコース

背番号一栄一落スポーツ紙

空財布人の情けを知りつくし

このことはなかったことと笑いあい

引出物家風の隅を覗かせる

拭くほどに北山杉のあたたかし

年輪の深さを思う御挨拶

ノイローゼ縄美しき蛇となる

ホッとして息つく銀行の俳画展

信じたいその一言を聞きに来る

ためらいの言葉は知らぬプツシユフォン

津山の作地炎仙氏へ贈る

火を入れたかまどへ男仁王立ち

ひと房のレモンに紅茶満ち足りぬ

毒説を吐いて味方の虹となる

古傷を持たぬ男はなかりけり

割り切つてドンパン節でも歌おうか

残飯の落ち目を見たり冷蔵庫

錦鯉涅槃の瞳泳がせる

萬国旗クーデターの彩も見え

反論の中で躓き老いを知る

廬遮那仏そろそろお昼近うなり

人間の愚痴も我執も神棚に

追い剥ぎのように電話をかけて来る

藤原克彦君の結婚を祝う

喜びは八重の潮路へ船出して

四条畷小学校同窓会

胸上げにされて涙は涸れたまま

足るを知る涅槃の花が咲きみだれ

脇役にまわる男の影法師

負けこんで軍艦マーチ哀れなり

夫婦の間にレフリーはいない

むき出しの闘志定期券をサッと出し

大学のオチケン羽織が落ちつかず

次男の結婚を祝う

アルバムに二人三脚貼られたり

本番で声がつまるも齡かいな

ひよつとことおかめが話すターミナル

香典をあたふた入れて確かめる

瑠璃暮色家族に嘘はありはせぬ

流転する今日の暮しのバーベキュー

末法の世に親鸞さんも苦笑い

履歴書に二ページほどの人生よ

茶碗むしゆつくり食べて法事めき

箸立ての箸それぞれに悩み持ち

人間の欲それぞれに腕カバ―

橘高薫風先生の東洋樹賞受賞を祝う

柳界の光となれよとこしえに

橘高薫風先生
きつたかくふう

麻生路郎に師事。著書に「有情」「檸檬」「肉眼」
編著に川柳全集第二巻「麻生路郎」がある。

現在「川柳塔社」の副主幹。

人生に三者凡退あってよし

追伸のくだりはつきり予防線

当方に名刺がきれて負けている

月給の重さと軽さ縄のれん

一枚の瓦に祈りこめている

陳情書一括政治は裏でする

かけている眼鏡を
探す鼻の汗

人間のジョーク
本心覗かせる

検討をすれば
一字ずつ崩れ

ひやかしの骨董品を買わされる

古切手過去に祈りをこめている

平野実氏へ贈る

鼓打つ男の視野に光るもの

黙秘権酒がまわってしゃべり出し

安らぎの視野に軍手が乾してある

五百羅漢五百の笑いと哀しみと

歌っているのか踊っているのか歌謡曲

盗塁のように浮世はいかぬもの

信用は尺取り虫に似たりけり

ちっぽけな義理を果たして瘦せている

御挨拶地酒の中に滲み通り

「川柳塔社」二百号記念大会

殉教も一揆も知って大樹かな

自画像はピカソかマチスか知らねども

中流の意識それぞれ翳り持ち

藤原貞毅君の結婚を祝う

今日よりは二人睦みて行く旅ぞ

大淀の草に寝ている哲学よ

ルーキーの素顔に闘志溢れたり

梵鐘を撞いて凡悩の土を踏む

地下鉄の切符確かに酔うている

熱い茶の熱い情けをすするなり

無器用が板についてる朗らかさ

大安の空港右往左往する

西国第四番施福寺

さりげなく納経帖の多忙なり

社内報朴念仁が刷っている

ピストルのようにライター突きつける

螢雪の裏を返せばよくさぼり

毒説が減ると老人呆けてくる

水子不動童話を読んで聞かそうか

人間の愚痴も我執も神棚に

老いの坂老いは知らないページ操る

素うどんのズバズバ言いたいことを言い

石井南放氏に贈る

何時見ても桂林夢幻の墨絵かな

天の声地の声やがて関の声

前略後略お金の無心です

手相見るコンピューターのあっけなし

大仏様時には背伸びもしたかろう

宇治風景（五句）

宇治橋

平安の彩極まりて擬宝珠よ

平等院

定朝の刻む仏の未来像

宇治対鳳庵

ここに来てはのぼの匂う山頭火

対鳳庵の手前に山頭火の句碑が、ひっそり建っていた。
流浪の旅のしみみとした趣きがある。

「春風の扉開けば南無阿弥陀仏」とある。

宇治団子水無月添えて御挨拶

斉藤写真館

お誕生お見合い叙勲の煌びやか

あの世にも等級がある葬祭店

アフガンを思う坊やの貯金箱

漫才のコンビ夫婦めき他人めき

スタイルもナウく落語のオチとなり

ジョギングの三本筋が頼もしく

マイルドセブン又一本の罪を持ち

貸し借りも忘れた顔の露天風呂

前山北海先生を悼む

色紙書くハワイの人はもういない

村島秀村氏へ贈る

端然と九十一歳句会の灯

荒武時平氏へ贈る

我に來て語れ愛犬ロッキーよ

文樂好き勘定流の名刺出し

ケシゴムの器用貧乏繰り返し

岡村久志良先生に贈る

手をつなぎ鷺羽の山に遊ばんか

西園三十三番華嚴寺

すがすがし谷汲山の汗を拭く

人間万歳雑音なんか気にしない

ツアウトさてこれからの人生か

転んでも駆けても二人三脚で

NHKの辻嘉一ショーを見る(二句)

京おとこ包丁一代六十年

健やかに幸田文さん話しかけ

亡父を憶う（六句）

家系図を継ぎ足し今日も生きている

ブランコよ父の自画像越えて行け

桂林に似たる南画よ父の瞳よ

ほそぼそと父より長く父を知る

戒名に五三の桐が透き通り

気がつけば父の足跡踏んでいた



跋

羽原静歩氏が川柳句集を出すという。随分失礼ない方だが、それだけの作品があるのかと一瞬思った。しかしそれは私の誤解であつた。句集を編むにもそれぞれの意味があつて、世に問う文学作品もあれば、彼のように人生の記録として生活の軌跡を綴る場合もある。

静歩氏が、古稀の坂を越えて原点に還り、その過去を素直に回顧するといふ、誠にうれしいことである。彼はこの一冊を編集するのにマンションの一室を仕事部屋にして異常な情熱を燃やした。

目次によれば、思い出の句に始まる、教師になる精神形成の環境があり、戦時への懐古や、川柳初心時代の感慨を偲ぶことができる。そして、孫、幼稚園、ふるさと、と彼の世界は平凡だが、その風景を殊のほか大切にしていることがわかる。彼の女は「勲章はいらぬ母ひとすじの道」に代

表される母や、その娘像であつて清潔で貞淑なのである。いつも温かい陽射しのある縁側を心に持てることは、健全な教育者のころのあり方なのだろう。「私の強い男のどこかノイローゼ」彼は正に私の強い男であつた。天理教を信仰することによって彼は自己を再発見することができたのではないかと思う。「天理高校のブラスバンドを見て」の、素直な彼のまなざしが、穏やかに笑っている。柳川に旅して白秋を偲び、松山に子規を恋ひ、漱石を慕ひ、山頭火に想いを馳せて彼は旅好きである。九州、中国、能登、信州、佐渡、東北、北海道はおろか、沖縄、ハワイ、アメリカ、遠くスイス、フランス、カナダ、ニュージーランド、オーストラリアと貪欲に旅をするのである。

家系図を継ぎ足し今日も生きている

静歩氏は根っからの教育者である。その道はひたむきに真つ直ぐである。第三者の眼から見れば、その一つ一つの句は光つてはいるが、面白味に欠けるきらいがある。この句集は作品の評価を問うものではない。一人の人生の記録である。自在な表現による今後の実りを期待したい。

昭和五十七年十二月

高杉 鬼遊

あとがき

あわただしい時の流れの中で数々の出会いと別れを繰り返して、私も七十才になった。人生の出会いと別れ、それは喜怒哀楽のミックスされた数々のドラマであり、足跡であると思う。私にも、私なりの足跡がある。しかしその足跡は、昭和八年以来ただ平凡な一教師として生き続けてきたばかりである。

昭和三十七年の秋、麻生路郎先生の「川柳雑誌」及び橘高薫風先生の句集「有情」を見てから、私の趣味の方向が大きく一変したと思う。今回おがましくも川柳句集「足跡」を刊行しようと思いたったのは、私にとって思い出の深い同窓の諸兄、幼稚園・保育園その他の各位並びに一般の川柳作家に私の辿った足跡を見ていただきたいと思ったからである。

明治の文豪島崎藤村は、小生が生れた大正元年の冬「藤村詩集」の合本第

十六版の序の末尾に

「自分の着けて来た小さな足跡は斯の古い木の葉のような詩集の中に僅かながらにも残って居る。」

と更に又「若菜集」の巻頭には

「おほかたはかみてすつべきうたゝねのゆめのそらごと」

とあるように私の「足跡」は、一般の川柳作家にとっては他愛のない駄句ばかりで一笑されることは百も承知の上である。私にとって、特にご縁の深かった方々が、一人でも多く川柳の楽しさを知っていただいたら、これに越した喜びはない。

今回の句集刊行にあたり、特に川柳塔社の主幹・西尾栞先生には題簽のご揮毫を賜わり、同社副主幹並びに編集長の橘高薫風先生には文字通りご多忙中にもかかわらず親身になって細部にいたるまでご指導を賜わり、又序文までいただき光栄の至りである。

川口弘生先生には資料の提供などいろいろご配慮を賜わり、高杉鬼遊先生には跋をお願いし、又編集には谷垣史好先生に細部にわたり適切なご指導をいただき、誠にありがたいことである。

直原玉青画伯には素晴らしい絵で句集を飾っていただき、蒔絵作家の涌波佳秀先生にはカットを担当していただき誠に光栄である。大勢の方々の並々ならぬご協力によってこの句集が発刊できたことを思う時、これらの方々に報いるただ一つの道は、微力ながら「川柳」を通じて私自身を静かに育てていくことだと思う。

我のほか皆師なり

合掌

昭和五十七年十二月一日

羽原静歩

あとがきにそえて

齡を重ねて、聽てというところまで来た時に、人は過去を振り返って、山坂峠を越えてきた数多くの出会い、別れ、愛したこと、憎らしく思ったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと等々を頭の中で整理をし、その想念を綴ってみることができるといことは、誠に倅せの一語に尽きることだと思っています。私達二人が縁を結んでいてから四十三年。悲喜交々、筆舌に尽し難いという毎日もありました。でも、私は、性格の通り自由に私なりの教育に對する情熱を、細々ではありましたが、燃やし続けてまいりました。

その間、本人は「川柳」という文学の道、この道ひとすじを光明として歩いてまいりました。そのことが今日「足跡」刊行というこのことに繋いでいただいた奇縁だと思います。私は、この道を乞々と脱兎の如く或る時は壁に向って破り得ぬスランプに苦しみ、歎きながらも、しつこく続けてくること

が出来たのは、その執念と、この変人とも考えられる男に熱誠あふれる指導をいただいた良き師・橘高薫風先生の一方ならぬ愛情と、慈しんでいた、この道の諸先生方のお力添えの賜物だと思っています。何とお礼を申し上げてよいやら表現する言葉さえありません。

洞窟の中を長い間歩き続けて、やっと太陽の光の射したことを感じ得た一瞬の喜びで私にとって、こんな嬉しさは未だ味わったことがありません。

お力添えを得て本人が益々この道に勤しみ、毎日を大切に歩き続けて、来たるべき喜寿には第二の句集が出来ますよう、欲深い願いを立て、このことを祈念して、感謝の心したいと思います。

ゆき暮れて ふと灯り^{あか}あり冬の窓

昭和五十七年十二月一日

羽原香苗

略 歴

大正元年12月	愛媛県今治市波止浜町に生れる
昭和8年3月	愛媛県師範学校本科第一部卒業 (現在の愛媛大学教育学部)
昭和8年3月	愛媛県公立小学校訓導
昭和11年4月	大阪府公立小学校訓導
昭和19年6月	応召
昭和21年5月	復員
昭和24年3月	大阪府守口市立第三中学校教諭
昭和30年4月	山下翠庸先生に俳句を学ぶ
昭和37年3月	大阪府守口市立第一中学校教諭
昭和40年2月	川柳雜誌社会員
昭和41年3月	大阪府守口市立第一中学校退職
昭和42年4月	かおり幼稚園理事長
昭和57年10月	川柳塔社理事

句集足跡

昭和57年12月1日 発行

著 者 羽 原 静 歩

〒570 守口市外島町2-11

コスモハイツ守口308

TEL (06)991-2270

発行所 川 柳 塔 社

大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号

TEL (06)629-6914

印刷・製本 大村印刷株式会社

